

主催… 県立神奈川近代文学館 / (公財) 神奈川文学振興会
共催… 東海大学文学部文芸創作学科 / 後援… 月刊『望星』

小島ゆかり ◎ 歌人

長谷川 權 ◎ 俳人

辻原 登 ◎ 作家

半歌仙 『まつ逆さまの巻』



昨年十一月一日に横浜市の神奈川近代文学館で、開館三〇周年を記念した湘南連句座談会が開かれた。三人の選者の「発句」「脇」「第三」に続けて、参加者が楽しみながら句を付け、半歌仙十八句を巻き上げた。

垂直から水平の展開へ

辻原 この湘南連句も十一回目となりました。今年は神奈川近代文学館が三十周年ということもあり、この港の見える丘での連句会となりました。よろしくお願いたします。

長谷川 今回は半歌仙ということで、表六句と初折の裏の合計十八句を巻いていきます。すでに発句、脇、第三はできていますから、会場の方々には四句目から詠んでいただきます。まずは発句、脇、第三についてなぜこうした句になったのかを伺いたいと思います。

小島ゆかりさんの発句ですが、まつ逆さまというあたりに、なにか新境地への情念が感じられるのですが(笑)、そのあたりからお願いたします。

小島 今年は発句のご指名をいただきました。この句を詠みました。

・ 鳩鳥のまつさかさまの遊びかな

鳩鳥とは、水鳥のカイツブリのことですね。お尻を立てて垂直に水の中をくぐる鳥です。私は水鳥が大好きで、姿を見ていると、私たちの命は豊かな遊びの時

半歌仙 『まつ逆さまの巻』

〔初折の裏〕

発句 鳩鳥のまつさかさまの遊びかな ゆかり

脇 雪に埋れし桃源の路次 登

第三 象の背の輿に揺られて夢をみて 權

マルコポーロに麻布を売る 圭祐

アルバイト時給上がった秋の月 由祈

暗黒卿が秋刀魚焼きをり 鯨

〔初折の裏〕

初句 舟小屋の立ち並びいる秋の浜 右左子

離婚届にはんこを押して 和枝

一夏を起業の才に賭けてみる 水木

拾った猫がタレントになり 知恵子

ちやんとした仕事につけよ子供達 星キン

母の芋煮をしかと味はふ 千枝

飯館の宴に月の客一人 俊彦

山中に聞く秋の猿声 久美子

かくれ湯に今年さいごの旅をして 水木

すみれの中に昼めしを待つ 一郎

突風の中にひらめく花びらよ 由祈

折端 巨船のごとく春は逝くなり 竹詩

間を楽しむためのものなのかもしれないという気持ちで湧いてきます。鳩鳥の鳩は、古典にも登場する鳥で、「鳩の海」と言えば、琵琶湖のことです。

まつ逆さまというのは、何かがなかなか上手くないかなとき、斜めとかちよつとかしぐよりは、思い切ったまつ逆さまになってみたら、また違う場所に出られるのではないかと。そう思わせてくれるので、大変好きな言葉でもあります。

辻原 小島さんから発句をもらって、鳩の海——琵琶湖がすぐ浮かんだのですが、まつ逆さまの遊びとは、鳩鳥が貝を捕るための姿ですね。ですから、遊びと同時に食欲を満たすということ。いのちを繋ぐために食べなければならぬ。

そうした真剣さと遊びとが、まつ逆さまという言葉で表されている。鳩鳥とありましたから、まずは琵琶湖です。ここには鮒やうなぎやモロコや鮎など、たくさん魚がいますよね。

琵琶湖には鮒魚という魚があります。琵琶湖の周辺には水葦内湖という、小さな湖が幾つもあつた。今でも残っています。その内湖に昼間の暑さを避けて魚が入り込む。夕方になると本湖に戻っていくので、水